

山内瑛姫の晩年（2）

—喜寿と酒田清遊—

第75回（昭和43年卒） 青柳明子

大正6年（1917）1月7日、酒井忠悌は今年喜寿を迎える瑛昌院の御祝いにつき、酒井家家扶の菅実と打合せを始めた。菅実は幕藩時代の家老菅実秀の4男で、明治14年生まれ、30歳代半ばのこの頃は酒井伯爵家の家扶（家令の次席）であった。25歳の忠悌より一回り上である。引出物は御盃、袱紗などとし、値段や物を調べて手配することなどを決めた。袱紗の方は東京の子爵大給近孝に嫁いでいる姉の米子を通じて入手することにし、その旨の願いを手紙で依頼すると、1月16日に「東京姉上様」より諾の返事があり、中巾35枚を注文してもらうこととした。1月21日「御祝盃」の見本を瑛昌院に御覧に入れて、準備は進んで行った。2月14日には注文の品物は殆ど整い「大給様へ代金六十八円入りの郵便を出し」たり「加藤宅馬を通じて注文していた御盆十枚」も出来上がってきた。この頃には御祝いの期日を3月3日と確定（当初は2月中を予定）し、大給家から御祝いとして飾り物などが届けられた。

ところで、真冬の1月から2月にかけて、庄内では兎狩りが盛んに行われたようである。「忠悌日記」によれば、1月24日は吹雪の日であったが、荘内中学校の生徒らが、おそらくは学校行事として西目付近で兎狩りを行い、獲は11羽であった。2月18日は酒井家とその関係者一同が兎狩りをした。真夜中の午前零時に家中新町邸に集結して出発、2時頃、松ヶ岡で開墾場の一行と落ち合い4時半榎木代に至り、とある神社で休憩、朝食を摂り、5時半から登山すること1里。ようやく明るくなった午前7時から総勢80名余で兎狩りが開始された。第1回は獲20羽、第2回は30羽であった。午前11時頃から雨となり、曇（みぞれ）に変わったので、昼食を摂り、その後小規模に狩って獲5羽。正午過ぎに帰途につき、午後3時に後田（松ヶ岡）本陣で小豆粥の接待を受け、「戦士皆舌つゝみをなしてつめ込めり。為に疲労も癒え、五時半出発して、七時半に帰宅す。総獲数五十五羽。」であった。全行程、すべて徒歩での丸一日の強行軍である。翌日は松ヶ岡組も鶴岡に来て、100名以上で大兎汁大会が催された。

兎狩りの事を日記から引用したのは、この当時の彼の日常生活の一端を紹介したかったからである。忠悌は檜物町邸に日がな一日暮らしているわけではなかった。日記によればほぼ毎日「家中新町に出仕」していた。但しこの「出仕」という表現は大正3年11月に家中新町から檜物町邸に移ったときからの1年ほどで、その後はただ「家中新町に行く」に変わった。

晩秋から春先までの頻繁な鴨猟、真冬の兎狩り、夏の磯釣りなど、実益と心身の鍛錬を兼ねた昼夜兼行の徒歩行をはじめ、銃や猟具の手入れ、各邸の庭や大督寺墓所の手入れにいそしみ、出版事業のある時はその作業を手伝った。また古典の勉強会もあり、史記、春秋左氏伝、藩翰譜などの講義がそれぞれ月の3・5のつく日、また9のつく日など定められた日にあるので、その下読みも欠かせなかった。加えて檜物町邸では敷地内の菜園で野菜や花を作っており、後には鶏も飼うようになったので、農事にも忙しかった。その合間を縫っての祝いごとの準備だったのである。

ところがいよいよ準備も整ってきた2月27日「母上様昨夜御腹痛有之、午後高良（高橋良斎）伺いしも格別の事に不被有入（あらせられず）との事にて終日御臥床被有在（あらせらる）」ということが起きた。この日、忠悌は未明から「両兄上様（忠良、忠孝）」をはじめ、十数名の一統と共に藤沢不動に行き、その一帯で兎狩りをなし、夕方帰宅したので、侍医の診察はその留守の間であったろう。雪の降る一日で、前日から冷え込んでいたのが老齡の瑛昌院の体に障ったのかもし

れない。

2月28日、忠悌は「朝、御祝用袱紗（の包みに）に寿の字を書き」、月末なので大督寺の御廟と墓所に代拝し、家中新町邸で昼食を頂いた。午後、念のため侍医の診察を願ったが、彼によれば決して格別の事はなく、3日の御祝も差支えないという見立てだったので、祝宴の延期はしないことにした。

3月2日、「喜」の字の入った饅頭、餅などの注文品が届いた。菅実、図金（図司金太郎）の両名が、掛け軸や部屋のしつらいなどの準備を手伝った。

大正6年3月3日（土）は数日間降り続いていた雪も止み、晴天となった。いよいよ瑛昌院喜寿の御祝いの当日である。ここは「忠悌日記」の全文を掲げることにしたい。

「起床七時、菅実、図金其他の手伝ひ、朝より来り、大いに尽力す。午後より欠席者の送膳をなさしむ。午後四時より人々来り。同半、町野を除く他、全部揃ひたり。五時少々過より御祝宴始り、いとも賑やかに七時前散会。八時過より女中、大野始めの宴会、また九時過より小使いの宴会も開かれ、亦、大いににぎやかなりき。午後四時過、大給様より祝電到着。本日は天気と云ひ、其の他万事好都合にして何等一点の手落なく過ぎしは尤も幸いなりにき」

招待客のみではなく、日頃檜物町邸で働いている人すべてが瑛昌院の長寿を和気あいあいと寿ぎ、忠悌は大役を無事に務め上げた安堵と自負が垣間見える文章である。

瑛昌院77歳の喜寿祝いは滞りなく済んだ。3月4日は菅実が来て、終日後片付けを手伝ったので「勘定、送り物、東京御挨拶品等、殆ど総て出来ず。昨日の御礼とし来るもの多し」。実際何名が宴席に連なったのかは日記には記述がないが、引出物の袱紗の数から推せば35名から40名と思われ、かなり盛大だったと言えよう。3月5日は祝宴招待の御礼として、酒井忠良（ただなが）、忠孝（ただもと）が揃って檜物町邸を訪れ、これを以て喜寿の祝いの事はほぼ片がついた。

大正6年は1917年だが、この頃の世界情勢に少し目を向けてみよう。3月17日の「忠悌日記」には「露国に革命起り、皇帝退位せん模様と新聞にあり」とある。ロシアの2月革命がようやく伝わってきたものらしい。ラジオ放送が庄内で聴けるようになるのは大正15年のことで、それ以前の社会、世界の情報源はもっぱら新聞であった。大正3年（1914）に始まった第一次世界大戦のことも、日記には新聞の引用として書き込まれることはあったが、まだまだ遠い国の出来事であった。

瑛昌院は時折軽い腹痛で臥床することはあったが、いずれも大したことはなく、4月下旬の桜の時期には、侍女のみつとともに公園の桜を愛でたりしていた。例年の4月1日の稲荷社祭と瑛昌院御誕生日は喜寿の祝いが済んだばかりなので、5月に延期することとした。4月26日、忠悌は致道館での「桜下宴」の帰途菅実と同道し、「酒田御出の節、御土産につき協議」している。酒田の本間家からの招待がいつなされたのか日記からは読み取れないが、同28日、忠悌は「指物師林治」へ土産の貴重品を入れる桐箱を、来月5日ころまでに作るよう依頼しているので、酒田行は5月以降ということが前もって決まっていたようである。

5月10日、例年より一ヵ月余遅れて、檜物町邸の稲荷社祭と瑛昌院のお誕生日が祝われ、例によって午後、町内の子供達にお菓子が配られた。菅実、大野も共に夕食の祝膳を頂いた。

5月14日午後、酒田の本間光弥が檜物町邸を訪れた。この時の本間光弥は明治9年生れなので、40歳を過ぎたばかりである。まだ本間家の家督を継いでいないが、父親の光輝と共に家業にいそ

しむ一方、教育関連への大口寄付もして、後の大正11年には財団法人荘内育英会を設立するなど社会貢献をしている。

その光弥が「酒田御出、二十七、八日頃にては如何や、御内意伺ひに来る」。こうして5月27日、28日の日取りが決定したかに見えた。しかし、5月25日の天神祭の日、忠悌が家中新町邸に行くと「本間要吉来たり、此二十七、八日頃、御出願ふ筈の処、子供ハシカにかゝり居る故、延引（来月三、四日頃）ありたしとの事なりき。」ということで酒田御出は6月4日に決定した。

ところが、前日の6月3日「昨夜十一時頃より母上様例の御持病御腹痛あり。御吐気もありしとの事に明日の酒田御出は御中止の止むなきに至った」のである。その旨菅実に通し、酒井家家令の加藤宅馬からおそらくは電話で酒田の本間家へ事情を話して断りを入れ、今後の御出は6月の11日頃となった。瑛昌院の容体であるが、侍医の高橋良斎の見立てによれば「全く昨日の寒さのためなり」ということであった。

6月8日は忠悌の父・故酒井忠篤の「御三年祭」であった。その2日前の6日には東京姉上様こと大給米子と、大給家で花嫁修行中の歌子（忠悌のすぐ下の妹）が列車で到着した。但し、この大正6年の時点では陸羽西線が新庄から酒田までは通じていたが、鶴岡・酒田間をつなぐ路線はまだ無くて、鶴岡への最寄り駅は狩川であった。大正8年に鶴岡駅が開設されるまで、東京方面から来る人は狩川で降り、バス（乗合自動車）もしくは人力車で鶴岡まで来なければならなかった。この乗合自動車は明治43年秋に設立された鶴岡自動車株式会社が運営しており、またタクシーも大正元年に同社が創業したものである。瑛昌院が湯田川行きなどに用いた自動車はこの会社の「貸切り自動車」で、タクシーというよりはハイヤーという呼び名が適切かもしれない。

6月8日の故酒井忠篤の「御三年祭」は酒井家親族、関係者一同が参列し、もちろん瑛昌院も参じ、滞りなく済んだ。その際、酒田の本間家も出席していたらしく、「本日、本間の願にて来る十一日、東京姉上様及歌子も御招待致すに付、別に御迷惑にあらざるかを伺ひ、直に復命す」と日記にはある。つまり、酒田行きに米子と歌子も加わることになったのである。

6月11日（月）、季節はすでに梅雨の候で小雨がちの日であった。酒田行きのこの日、忠悌は朝5時に起き支度していたが、午前7時頃家中新町から電話がきた。それによると、2台頼んだハイヤーのうち1台が故障で動かないという。「依りて当女中二名、および加省（加藤省介）は腕車で行く事となり、当方三人、姉上様、歌子のみ自動車にて出発の事に決定」した。瑛昌院、忠悌、留尾、米子、歌子、加藤省介、みつ、常江の一行8名である。加藤省介は加藤宅馬の次男で、山形師範を出て教師をしていたが、30歳の時健康を害して辞職。回復後は酒井家に勤務した。この当時37歳で一行の世話役として同道したのであろう。人力車の3名は8時に、自動車の5名は8時半に家中新町を出発し、10時前に酒田の本間家の「浜畑別荘」に到着した。この頃、当然舗装道路などはなく、車はかなり揺れたのだろう、瑛昌院が途中で「母上様、新堀処より御吐気あり、着後少しく御休み後は幸い御快方に向はせられた」のであった。

ところで、本間家の浜畑別荘であるが、現在の本間美術館のことである。佐藤三郎著『酒田の本間家』によれば、文化10年（1813）4代日本間光道により作られた。「完成当時は平屋建てであった。（中略）現在の二階は大正の初め、大正天皇が巡幸の途次御宿泊になるというので、大改造したもののだが、その時は東北に伝染病が発生したのでお出でにならなかった。しかしその後は今上天皇をはじめ皇族の方々がつぎつぎとお成りになっている。」

車酔いの治まった瑛昌院は一同と共に、別荘の庭を散策した。「庭園は北の鳥海山を借景に築

山を東に築き、武学流回遊式庭園造られたもので岩組も当時の東北の田舎には珍しく本格的に築庭されたものである。西の岡に松の巨木が今も亭々とそびえているが、その下に東屋がおかれている。大正の初年頃まで毎年この松に鶴が舞いおりる姿が見られていた。それでこの庭園を『舞鶴園』と称している」（『酒田の本間家』）

余談であるが、本間光道は美杜李（みどり）の号を持つ俳人でもあり、常世田長翠（とこよだちょうすい）という俳人のパトロンでもあった。後世に「冬夜の詩人」と呼ばれた常世田長翠は、江戸時代中期の俳人春秋庵・加舎白雄（かやしらお）の高弟で、後に師の号・春秋庵を受け継ぐが、俗事に疎いタイプの人だったらしく、大勢の弟子を抱えて安楽に暮らせるはずの宗匠の座を捨てて、東北浪々の末、酒田の本間家の知遇を得て、この地で生涯を終えた。『酒田市史』によれば、長翠は現在の千葉県に生まれ「二十代の初め、江戸に出て茶事、築庭、絵画、琴、碁を学んだ」という文化人である。一説には浜畑別荘の築庭にも影響を与えた可能性があるという（『月刊spoon』2004年3月号）。佐藤三郎氏は「誰が設計したかは分かっていない」と述べているが、可能性はあり、かもしれない。

瑛昌院一行は、大正天皇のために大改造された二階で7時頃から夕食をとり、9時頃には終わって寝についた。

6月12日（火）は前日と打って変わり、非常な晴天であった。日記には「午前九時頃より一同腕車にて山居倉庫見物、取引所に寄り、小松屋工場視察。山王社参拝後零時、小幡楼へ行き昼食後、御踊、其の他十数番ありたり」午後六時同楼を辞し、日和山公園を見、六時半頃浜畑別荘へ帰った。お天気も良く酒田を満喫できた一日であったことだろう。

6月13日は帰鶴の日であったが、またまた天候が一変し未明から激しい風雨となった。迎えの自動車に菅実が鶴岡から同乗してきたが、この風雨では帰路に危険があるということで一同はもう一泊することとなった。本間家では午後になってから「お退屈でしょうから」とまた踊り手を寄こしてくれたので、数番の踊りを皆で鑑賞した。

次の日は風が少し残ってはいたが、晴れたので鶴岡に帰れることになった。瑛昌院は車酔いの懸念があったため「午前九時、母上様、余等（忠悌、留尾）及菅実、常江は腕車にて出発。途中押切にて小休の後、午後一時前無事帰宅。姉上様、歌子、加省、みつは九時三十分の汽車で狩川に行、同所より自動車で帰宅せりとて既に帰宅し居り」。

つまり人力車で休憩も含めて酒田・鶴岡間が4時間かかったのに比し、汽車と乗合自動車ではそれより短時間で済んだのである。ちなみに大正8年、鉄道が鶴岡まで延伸されると、鶴岡・酒田間は2時間以内で行けるようになった。

大正6年8月17日は戊辰の役後50年に当たることから、「戊辰戦後、庄内三郡殉難者五十年祭が荘内神社例祭、並びに招魂社祭と合わせて行われた」。例年通り大名行列が行われ、瑛昌院も家中新町に来て見物し、夕食後帰宅した。酒井家の「御次」の部屋では「御年寄はじめ本間光弥、並びに招魂社御手伝への御馳走」がふるまわれた。戊辰戦争で奥羽列藩同盟軍が破れてから50年の月日が経ったのである。ちなみに筆者がこの稿を書いている2018年は明治維新後150年の節目に当たる年である。